

薩摩半島から得られた九州沿岸初記録のコバンハゼ属魚類 3 種

佐藤智水¹・本村浩之²

Author & Article Info

¹ 鹿児島大学水産学部 (鹿児島市)

k2377198@kadai.jp

² 鹿児島大学総合研究博物館 (鹿児島市)

motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 04 December 2022

Revised 07 December 2022

Accepted 08 December 2022

Published 08 December 2022

DOI 10.34583/ichthy.27.0_32

Masayuki C. Sato and Hiroyuki Motomura. 2022. First Kyushu records of three species of *Gobiodon*, *Gobiodon* sp. A sensu Hayashi et al. (1990), *Gobiodon* sp. sensu Hayashi et al. (1990), and *Gobiodon* sp. 1 sensu Suzuki and Shibukawa (2014), from the Satsuma Peninsula, Kagoshima Prefecture, Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 27: 32–39.

Abstract

A single specimen (28.1 mm standard length; SL) of *Gobiodon* sp. A sensu Hayashi et al. (1990), a single specimen (7.9 mm SL) *Gobiodon* sp. sensu Hayashi et al. (1990), and two specimens (16.8–18.5 mm SL) of *Gobiodon* sp. 1 sensu Suzuki and Shibukawa (2014) were collected from the southwestern Satsuma Peninsula, Kagoshima Prefecture, Kyushu, Japan. Since these species have been previously recorded only from Wakayama and Kochi prefectures, and the Nansei Islands. Thus, these specimens, herein described in detail, represent the first records from Kyushu, Japan.

コバンハゼ属 *Gobiodon* Bleeker, 1856 は日本から学名未確定種を含む 19 種が知られ、体が強く側扁した小判型、鰓孔が胸鰭基底と同幅もしくはわずかに狭い、鱗をほとんどもたず体が厚い粘膜相で覆われる、腹鰭が吸盤状、頭部の感覚管が発達し頬部の孔器配列は退縮的であるなどの特徴を共有し (渋谷, 2004, 2021), おもにミドリイシ属 *Acropora* Oken, 1815 のサンゴの枝間に棲息する (明仁ほか, 2013; 渋谷, 2004, 2021). 本属魚類は九州沿岸において、薩摩半島沿岸から水中写真に基づいてフタイロサンゴハゼ *Gobiodon quinquestrigatus* (Valenciennes, 1837) が記録されているのみであり (田代ほか, 2022), その生息状況に関する知見に乏しい。

2022 年 5 月 5 日に鹿児島県南さつま市坊津町赤水海岸から 1 個体のフタスジコバンハゼ *Gobiodon* sp. sensu

Hayashi et al. (1990), 2022 年 9 月 8 日に鹿児島県南さつま市坊津町塩浦から 2 個体のアイコバンハゼ *Gobiodon* sp. 1 sensu Suzuki and Shibukawa (2014a), および 2022 年 11 月 10 日に鹿児島県南さつま市笠沙町から 1 個体のコバンハゼ *Gobiodon* sp. A sensu Hayashi et al. (1990) が採集された。これらの種は和歌山県, 高知県, および大隅諸島から八重山諸島にかけての南西諸島からのみ報告されていた。したがって, 上記の 3 種は九州沿岸における初記録であるため, ここに報告する。

材料と方法

標本の計数および計測は Winterbottom and Harold (2005) にしたがった。頭部感覚器官の名称は明仁ほか (2013) にしたがった。標準体長 (standard length) は体長または SL と表記した。計測はデジタルノギスを用いて 0.01 mm まで行い, 小数第 2 位を四捨五入した。計測値は体長に対する百分率で示した。標本の作製, 登録, 撮影, および固定方法は本村 (2009) に準拠した。生鮮時および生時の体色の記載は, 固定前に撮影されたカラー写真 (Figs. 1–3) に基づく。色彩の表記は財団法人日本色彩研究所 (2001) の系統色名に準拠した。本報告で用いられた標本は, 鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM) に保管されており, 上記の生鮮時および生時の写真は同館のデータベースに登録されている。

***Gobiodon* sp. A sensu Hayashi et al. (1990)**

コバンハゼ

(Fig. 1; Table 1)

標本 KAUM-I. 176961, 28.1 mm SL, 鹿児島県南さつま市笠沙町片浦大当漁港北側, 31°25'25"N, 130°10'16"E, 水深 5.0 m, 手網, 2022 年 11 月 10 日, 佐藤智水。

記載 計数・計測値を Table 1 に示した。体は後方につれて細長い滴型で, 頭部および体部は側扁する。体高は腹鰭起部において最大。頭部背縁の輪郭は上顎前端から眼窩後縁直上にかけて著しく上昇し, そこから第 1 背鰭起部に

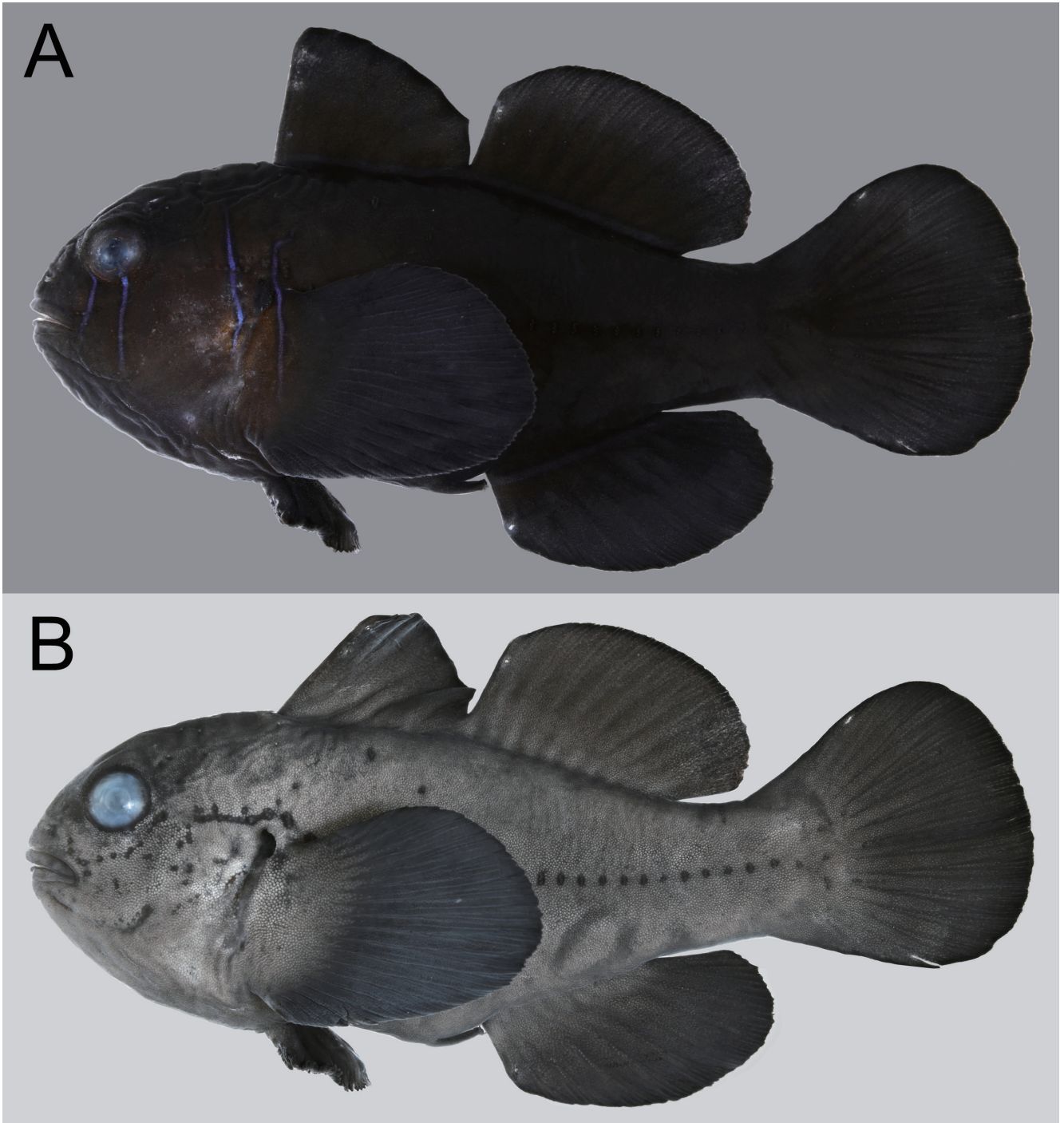


Fig. 1. Fresh (A) and preserved (B) specimen of *Gobiodon* sp. A sensu Hayashi et al. (1990) (KAUM-I. 176961, 28.1 mm SL) collected from Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland, southern Kyushu, Japan.

かけて緩やかに上昇する。体背縁は第1背鰭起部から尾鰭基底上端にかけて緩やかに下降する。頭部腹縁は下顎前端から腹鰭起部にかけて下降する。体腹縁は腹鰭起部から臀鰭起部まで体軸と平行となり、そこから尾鰭基底下端にかけて緩やかに上昇する。口裂は端位で、上唇は下唇より突出し、後端に向かうにつれて下降する。上顎後端は眼窩前縁直下に位置する。前鼻孔は短い管状。前鼻孔の開口部は上顎直上、吻端より後方に位置し、眼窩下縁の前方に位置する。後鼻孔は円形。後鼻孔の開口部は眼窩前縁の前方に位置する。鰓孔は胸鰭基底より僅かに狭く、上端は胸鰭基底上端の前方に位置し、下端は胸鰭基底上端上方に位置し

胸鰭基底の上部から約2/3に達する。左右の鰓膜は癒合し、癒合部は溝が無く滑らか。肛門は体の中央よりやや前方に位置し、そのすぐ後方に泌尿生殖孔突起をもつ。

第1背鰭は三角形。第1背鰭起部は胸鰭基底上端よりやや前方に位置し、第1背鰭後端は泌尿生殖孔突起基底後端直上に達する。第2背鰭および臀鰭は左右方向に長い楕円形。第2背鰭起部は第1背鰭後端の直後に位置し、第1背鰭後端の鰭膜は第2背鰭第1棘の基底付近でつながる。臀鰭起部は泌尿生殖孔突起の直後に位置し、臀鰭基底後端は第2背鰭基底後端よりやや前方に位置する。胸鰭は円形。胸鰭基底下端が上端より前方に位置し、胸鰭後端は第2背

鰭第3軟条基部直下に達する。腹鰭起部は鰓孔上端と胸鰭基底下端の中央直下に位置する。腹鰭は左右が癒合し、吸盤状になる。たまただ腹鰭の後端は肛門に僅かに達しない。尾鰭は上下方向に大きい円形。鱗はもたない。前眼肩甲管に開孔 B', C(S), D(S), E, F, H' および前鰓蓋管に開孔 M', N, O' がある。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1A) — 頭部, 体側部および各鰭の地色は一様に黒色を呈する。鰓孔付近は黄褐色。背鰭および臀鰭に基底に沿って灰色縦帯をもつ。虹彩はゴールド。眼を通る2本の平行に並ぶ水色横線をもち、前方の横線は瞳孔前縁直上の眼窩上縁から上顎後端に達し、後方の横線は瞳孔後縁直上の眼窩上縁から前鰓蓋下端に達する。鰓蓋後縁前方と胸鰭基底部にそれぞれ水色横線をもち、前者は眼窩後縁と第1背鰭第3棘基部の中央から上顎後端の垂線上に達し、後者は鰓孔上端上方から胸鰭基底を通り胸鰭基底の上部から約2/3に達する。鰓孔上端に瞳孔大の明瞭な黒色斑をもつ。

固定後の色彩 (Fig. 1B) — 頭部の眼, 鰓蓋後縁前方, および胸鰭基底部を通る計4本の水色横線は消失し、一様に灰色を呈する。生鮮時鰓孔上端にみられた明瞭な黒色斑はそのまま残る。虹彩は青色となる。体部は灰色。胸鰭および腹鰭は生鮮時と同様に黒色。背鰭, 臀鰭および尾鰭の基底部付近は灰色を呈し、辺縁にかけて生鮮時の黒色が残る。

分布 本種は日本を含むインド・西太平洋に分布し (明仁ほか, 2013; 鈴木, 2004, 2021), 国内からは小笠原諸島, 静岡県西伊豆, 和歌山県白浜, 高知県柏島, 愛媛県室手, 大隅諸島 (屋久島・口永良部島), 奄美群島奄美大島, 沖縄諸島伊江島, 宮古諸島 (宮古島・伊良部島), および八重山諸島 (石垣島・西表島) からこれまでに記録されており (林ほか, 1990; 鈴木・瀬能, 1997; Senou et al., 2006, 2007; 吉郷・中村, 2008; 明仁ほか, 2013; Motomura and Harazaki, 2017; 木村ほか, 2017; Nakae et al., 2018; 鈴木, 2021), 本研究により新たに鹿児島県本土からも確認され

Table 1. Counts and proportional measurements of specimens of *Gobiodon* sp. A sensu Hayashi et al. (1990), *Gobodon* sp. sensu Hayashi et al. (1990), and *Gobiodon* sp. 1 sensu Suzuki and Shibukawa (2014a) from the Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland, southern Kyushu, Japan.

	<i>Gobiodon</i> sp. A		<i>Gobiodon</i> sp.	
	KAUM-I. 176961	KAUM-I. 168180	KAUM-I. 173203	KAUM-I. 173204
Standard length (SL;mm)	28.1	7.9	18.5	16.8
Counts				
Dorsal-fin rays	VI, I, 10	VI, I, 10	VI, I, 11	VI, I, 11
Anal-fin rays	I, 9	I, 8	I, 9	I, 9
Pectoral-fin rays	20	18	19	19
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5	I, 5	I, 5
Dorsal segmented caudal-fin rays	9	9	9	9
Ventral segmented caudal-fin rays	8	8	8	8
Measurements (% of SL)				
Snout ot first dorsal-fin origin	35.6	41.0	36.2	35.6
First dorsal-fin origin to second dorsal-fin origin	23.5	20.8	20.1	21.2
Second dorsal-fin origin to anal-fin origin	37.5	25.7	33.0	30.1
Pelvic-fin origin to anal-fin origin	28.1	28.1	25.0	27.2
Snout to pelvic-fin origin	38.8	35.3	37.1	34.8
First dorsal-fin origin to pelvic-fin origin	40.5	33.8	38.7	35.7
First dorsal-fin origin to anal-fin origin	48.1	40.1	45.2	41.6
Pelvic-fin origin to second dorsal-fin origin	45.7	39.9	40.9	37.9
Head length	33.5	34.2	30.8	29.7
Head depth	39.2	30.6	35.9	34.1
Body depth	40.7	32.4	37.8	35.8
Pelvic-fin length	15.8	18.9	16.5	15.7
Anal-fin length	22.2	18.7	22.8	21.5
First dorsal-fin first spine length	19.6	11.5	10.8	10.8
First dorsal-fin sixth spine length	12.9	6.3	11.7	9.6
Second dorsal-fin length	28.6	24.3	32.3	30.8
Pectoral-fin length	33.0	30.6	23.5	25.8
Caudal-peduncle length	13.2	10.6	10.2	10.7
Caudal-peduncle depth	17.8	15.1	17.9	17.0
Interorbital width	37.0	29.3	17.6	14.0
Horizontal eye diameter	30.1	29.3	20.6	23.0
Snout length	29.8	27.0	28.3	28.5
Upper-jaw length	23.7	37.0	33.2	31.7
First dorsal-fin spine to first pectoral-fin ray	54.7	42.2	51.7	47.5

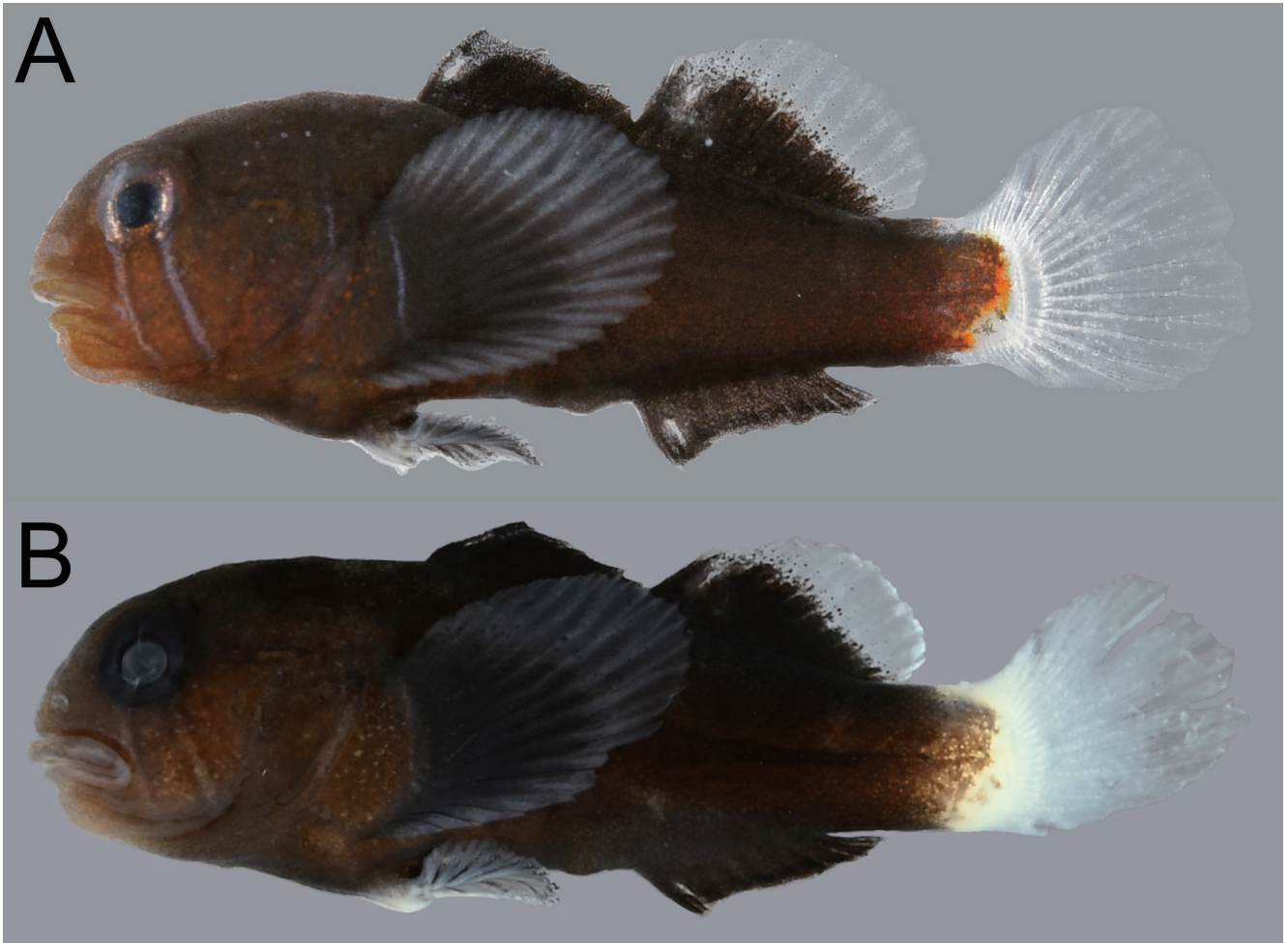


Fig. 2. Fresh (A) and preserved (B) specimen of *Gobiodon* sp. sensu Hayashi et al. (1990) (KAUM-I. 168180, 7.9 mm SL) collected from Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland, southern Kyushu, Japan.

た。

同定 本研究において得られた標本は頭部、体側部、および各鰭の地色が黒色であること、頭部から胸鰭基底にかけて4本の水色横線をもつこと、鰓蓋と胸鰭基底を通る水色横線が鰓孔上端上方から胸鰭基底を通り胸鰭基底の上部から約2/3に達すること、鰓孔上端に瞳孔大の明瞭な黒色斑をもつこと、上顎後端が眼窩前縁直下に達すること、鰓孔の上端が胸鰭基底上端の前方に位置し、下端は胸鰭基底下端上方に位置し胸鰭基底の上部から約2/3に達すること、鰓蓋下部と峡部の間に溝が無く、滑らかであること、および第1背鰭が三角形であることなどの特徴が林ほか(1990)、明仁ほか(2013)、および鈴木(2021)の示したコバンハゼによく一致したため本種に同定された。

備考 Aoyagi (1943)は琉球列島から得られた標本を *Gobiodon quinquestrigatus* (Valenciennes, 1837)と同定し、標準和名をコバンハゼとした。益田ほか(1975)はAoyagi (1943)の示したコバンハゼが *G. quinquestrigatus* とは異なるとし、*Gobiodon citrinus* (Rüppell, 1838)の学名を適用した。林ほか(1990)は奄美大島から得られたコバンハゼ10標本を *G. citrinus* と比較し、体色が黒色であること (*G. citrinus* は体色が黄色)、第1背鰭の外縁がとがり三角形状

であること(第1背鰭の外縁は円い)、鰓孔が狭く胸鰭基底の上部から約2/3に達すること(鰓孔は広く胸鰭基底下部に達する)、鰓蓋と胸鰭基底を通る水色横線が胸鰭基底上端のやや上方から胸鰭基底を通り胸鰭基底の上部から約2/3で終わること(鰓孔上端から胸鰭基底を通り胸鰭基底の下部に達する)、上顎後端が眼窩前縁直下に達すること(上顎後端は眼窩前縁直下に達さない)から異なるとし、*Gobiodon* sp. Aとした。本研究において得られた標本は、林ほか(1990)の示したコバンハゼ *Gobiodon* sp. Aの特徴に一致した。コバンハゼの記録は分布の項で述べたとおりであり、薩摩半島産の標本は本種の九州沿岸における初記録となる。

***Gobiodon* sp. sensu Hayashi et al. (1990)**

フタスジコバンハゼ

(Fig. 2; Table 1)

標本 KAUM-I. 168180, 7.9 mm SL, 鹿児島県南さつま市坊津町赤水海岸, 31°15'20"N, 130°15'30"E, 水深 6.5 m, 手網, 2022年5月5日, 佐藤智水。

記載 計数・計測値を Table 1 に示した。体は後方につ

れて細長い滴型で、頭部および体部は側扁する。体高は腹鰭起部において最大。頭部背縁の輪郭は上顎前端から眼窩前縁直上にかけて著しく上昇し、そこから腹鰭起部上方にかけて緩やかに上昇する。体背縁は腹鰭起部上方から第2背鰭基底後端にかけて緩やかに下降し、尾柄部から尾鰭基底上端まで体軸と平行。頭部腹縁は下顎前端から前鼻孔後部下方にかけて著しく下降し、そこから腹鰭起部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は腹鰭起部から尾鰭基底下端まで体軸と平行。口裂は端位で上唇は下唇より突出し、後端にかけて下方へ僅かに湾曲する。上顎後端は瞳孔前縁直下に位置する。前鼻孔は短い管状。前鼻孔の開口部は上顎直上、吻端よりやや後方に位置し、眼窩下縁の水平線上に達する。後鼻孔は円形。後鼻孔の開口部は眼窩前縁の直前に位置する。鰓孔は胸鰭基底と同幅、上端は胸鰭基底上端付近の前方に位置し、下端は胸鰭基底下端付近の前方に位置する。左右の鰓膜は峡部から胸鰭基底下端前方にかけて癒合し、癒合部は溝が無く滑らか。肛門は体の中央に位置し、そのすぐ後方に泌尿生殖孔をもつ。

第1背鰭は台形。第1背鰭起部は胸鰭基底上端よりやや後方に位置し、第1背鰭後端は肛門直上に達する。第2背鰭は半円形。第2背鰭起部は第1背鰭後端の直後に位置し、第1背鰭後端の鰭膜は第2背鰭第1棘の基底付近につながる。臀鰭は左右方向に長い長方形。臀鰭起部は泌尿生殖孔突起の直後に位置し、臀鰭基底後端は第2背鰭基底後端と同位。胸鰭は左右方向に長い楕円形。胸鰭基底下端が上端より僅かに前方に位置し、胸鰭後端は第2背鰭第2軟条基部直下に達する。腹鰭起部は胸鰭基底下端直下に位置する。腹鰭は左右が癒合し、吸盤状になる。たんだ腹鰭の後端は肛門に僅かに達しない。尾鰭は上下方向に大きい円形。鱗はもたない。前眼肩甲管に開孔 B', D(S), E, F, H' がある。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 2A) — 頭部、体側部および各鰭の地色は暗い茶色を呈す。頭部腹面は黄褐色。尾柄部後端はゴールド。虹彩は赤褐色、瞳孔の左右にゴールドの横線をもつ。胸鰭、腹鰭および第2背鰭の縁辺部にかけて白色半透明。尾鰭は縁辺部から基底にかけて白色半透明。眼を通る2本の平行に並ぶ水色横線をもち、前方の横線は瞳孔前縁直上の眼窩上縁から前鰓蓋下端に達し、後方の横線は瞳孔後縁直上の眼窩上縁から前鰓蓋下端に達する。鰓蓋後縁前方および胸鰭基底部に短い水色横線をもち、前方の横線は鰓孔上端前方から前鼻管下縁の垂線上に達し、後方の横線は胸鰭基底上端直下から下唇後端の垂線上に達する。

固定後の色彩 (Fig. 2B) — 頭部、体部および各鰭の地色は暗茶色。眼、鰓蓋後縁前方、および胸鰭基底部の水色横線は明るい茶色に変わる。虹彩は生鮮時赤褐色だったものが黒色となる。胸鰭、腹鰭および第2背鰭の縁辺部は白

色半透明。

分布 本種は日本、サイパン島、チャゴス諸島、および西沙諸島に分布する (吉野・山本, 1984; Winterbottom and Emery, 1986; 明仁ほか, 2013)。国内からは小笠原諸島、徳島県牟岐、高知県 (柏島・沖の島)、大隅諸島 (屋久島・口永良部島)、奄美群島 (奄美大島・加計呂麻島・与論島)、沖縄諸島 (沖縄島・慶良間諸島)、八重山諸島 (石垣島・西表島) からこれまでに報告されており (平田ほか, 1996; 明仁ほか, 2013; 鈴木・渋川, 2014b; Motomura and Harazaki, 2017; 木村ほか, 2017; Nakae et al., 2018; 萩原, 2019; 田中ほか, 2020; Motomura and Uehara, 2020; 望月ほか, 2021)、本研究により新たに鹿児島県本土からも確認された。

同定 本研究において得られた標本は頭部、体側部、および各鰭の地色が暗い茶色を呈すること、眼窩上縁から眼を通り前鰓外下端に達する2本の水色横線をもつこと、頬部に赤色帯や赤色斑点をもたないこと、鰓孔上端に黒色斑をもたないこと、尾鰭辺縁部が無色半透明であること (KAUM-I. 168180 は尾鰭基底まで无色半透明であったが成長に伴う変異の範疇であると判断した)、および峡部から胸鰭基底下端前方にかけて溝が無く滑らかであることなどの特徴が吉野・山本 (1984)、林ほか (1990)、明仁ほか (2013)、および鈴木・渋川 (2014b) が示したフタスジコバンハゼによく一致したため本種に同定された。KAUM-I. 168180 は頭部感覚器官の前眼肩甲管に開孔 C(S) および前鰓蓋管に開孔 M', N, O' がみられなかったが、本種は体長 30 mm 程度に成長することが知られており (明仁ほか, 2013)、KAUM-I. 168180 は 7.9 mm であることから、成長に伴う変異の範疇と判断した。

備考 吉野・山本 (1984) は *Gobiodon oculolinetus* Wu, 1979 を国内から初めて報告し、新称としてフタスジコバンハゼを提唱した。林ほか (1990) は吉野・山本 (1984) が報告したフタスジコバンハゼは背鰭基底部と臀鰭基底部に明るい白色縦線をもつこと、眼下の2本の水色横線が細く前鰓外下端に達すること、眼下の2垂線間が暗色にならないことから *G. oculolinetus* と異なるとし (*G. oculolinetus* は背鰭基底部および臀鰭基底部に明るい白色縦線をもたない、眼下の水色横線は口角部より下方に達さない、眼下の2垂線間は暗色を呈する)、フタスジコバンハゼを *Gobiodon* sp. とした。なお、明仁ほか (2013) は Winterbottom and Emery (1986) がチャゴス諸島から *Gobiodon fulvus* Herre, 1927 として報告したコバンハゼ属魚類とフタスジコバンハゼの標徴が一致することから、これらを同種であると判断した。本研究もこれにしたがいチャゴス諸島を本種の分布に含めた。なお、*G. fulvus* は原記載において体背縁に暗茶色斑が散在すること、眼下に2本の水色垂線をもたないことが記述されており (Herre, 1927)、

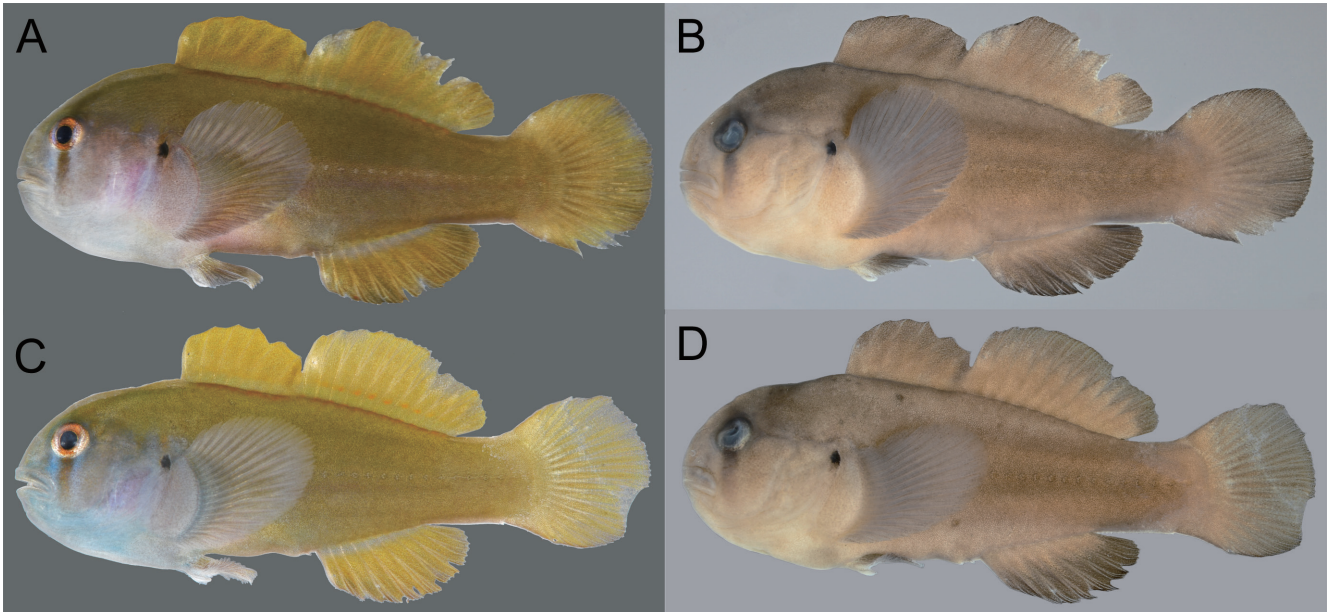


Fig. 3. Fresh (A, C) and preserved (B, D) specimens of *Gobiodon* sp. 1 sensu Suzuki and Shibukawa (2014a) (A, B: KAUM-I. 173203, 16.8 mm SL; C, D: KAUM-I. 173204, 18.5 mm SL) collected from Satsuma Peninsula, Kagoshima mainland, southern Kyushu, Japan.

体背縁に暗茶色斑をもたず、眼下に2本の水色横線をもつフタスジコバンハゼとは別種である(明仁ほか, 2013)。フタスジコバンハゼの記録は分布の項で述べたとおりであり、薩摩半島産の標本は本種の九州沿岸における初記録となる。

Gobiodon sp. 1 sensu Suzuki and Shibukawa (2014a)

アイコバンハゼ

(Fig. 3; Table 1)

標本 2標本: KAUM-I. 173203, 16.8 mm SL, KAUM-I. 173204, 18.5 mm SL, 鹿児島県南さつま市坊津町塩浦, 31°15'21"N, 130°13'58"E, 水深1–3 m, 手網, 2022年9月8日, 佐藤智水。

記載 計数・計測値をTable 1に示した。体は後方に長い滴型で頭部および体部は側扁する。体高は腹鰭起部において最大となる。KAUM-I. 173203は頭部背縁の輪郭は上顎前端から後鼻孔基底前縁直上にかけて著しく上昇し(KAUM-I. 173204は頭部背縁の輪郭は上顎前端から眼窩中央直上にかけて著しく上昇する), そこから背鰭起部にかけて緩やかに上昇する。体背縁は背鰭起部から第2背鰭基底後端にかけて緩やかに下降し, そこから尾鰭基底上端まで体軸と平行。頭部腹縁は下顎前端から前鼻孔後部下方にかけて著しく下降し, そこから腹鰭起部にかけて緩やかに下降する。体腹縁は腹鰭基底後端から臀鰭起部にかけて水平となり, そこから臀鰭基底後端にかけて緩やかに上昇し, 尾柄部から尾鰭基底上端まで体軸と平行。口裂は端位で上唇と下唇の前端は同位にあり, 後端にかけて下方へ僅かに湾曲する。上顎後端は眼窩前縁と瞳孔前縁の中央直下

に位置する。前鼻孔は短い管状。前鼻孔の開口部は上顎直上, 吻端よりやや後方, KAUM-I. 173203は体高中央の高さに位置する(KAUM-I. 173204は眼窩下縁の水平線上に位置する)。後鼻孔は円形。後鼻孔の開口部は眼窩前縁の直前に位置する。鰓孔は胸鰭基底と同幅, 上端は胸鰭基底上端付近の前方に位置し, 下端は胸鰭基底上端付近に位置する。左右の鰓膜が峡部から胸鰭基底上端前方にかけて癒合し, 癒合部は溝は無く滑らか。肛門は体の中央に位置し, そのすぐ後方に泌尿生殖孔突起をもつ。

第1背鰭および第2背鰭は左右方向に長い円形。第1背鰭起部は胸鰭基底上端の直上に位置し, 第1背鰭後端は肛門直上に達する。第2背鰭起部は第1背鰭後端の直後に位置し, 第1背鰭後端の鰭膜は第2背鰭につながる。臀鰭は半円形。臀鰭起部は泌尿生殖孔突起のすぐ後方に位置し, 臀鰭基底後端は第2背鰭基底後端よりやや前方に位置する。胸鰭は左右方向に長い楕円形。KAUM-I. 173203は胸鰭基底上端と下端がほぼ同じ垂線上(KAUM-I. 173204は胸鰭基底上端が下端より僅かに後方)にあり, 胸鰭後端は第2背鰭第2軟条に達する。KAUM-I. 173203は腹鰭起部が胸鰭基底上端よりやや後方(KAUM-I. 173204はほぼ同じ垂線上)に位置する。腹鰭は左右が癒合し, 吸盤状になる。たたんだ腹鰭の後端は肛門に僅かに達しない。尾鰭は円形。鱗はもたない。前眼肩甲管に開孔B', C(S), D(S), E, F, H'および前鰓蓋管に開孔M', N, O'がある。

色彩 生鮮時の色彩(Fig. 3A,C) — 頭部, 体側部および各鰭の地色はオリーブ色を呈す。背鰭基底に不明瞭な橙色縦帯をもつ。KAUM-I. 173204は第2背鰭基底付近の軟条間に橙色斑をもつ, 臀鰭基底に薄い水色縦帯をもつ。KAUM-I. 173203は頭部腹面, 胸鰭および腹鰭棘が白色

(KAUM-I. 173204 は薄い水色)を呈する。虹彩はゴールド。眼を通り口角部に達する2本の不明瞭な水色横線を持ち、この2横線間に頭部上縁から眼を通り口角部に達する灰みのオリーブの横帯をもつ。鰓孔上端に瞳孔大の明瞭な黒色斑をもつ。

固定後の色彩 (Fig. 3B,D) — 頭部, 体部および各鱗の地色は生鮮時オリーブ色だったものが黄白色となる。頭部背縁から眼を通り口角部に達する横帯は暗褐色を呈する。生鮮時鰓孔上端にみられた明瞭な黒色斑はそのまま残る。背鱗, 腹鱗, 臀鱗および尾鱗の縁辺はそれぞれ茶褐色または暗い茶褐色を呈する。

分布 本種はこれまでに和歌山県串本, 高知県柏島, 大隅諸島(屋久島・口永良部島), 奄美群島(奄美大島・江仁屋離島・徳之島・与論島), 沖縄諸島(沖縄島・慶良間諸島), 宮古諸島(宮古島), 八重山諸島(石垣島・西表島)から報告されており(Aoyagi, 1943; 平田ほか, 1996; Senou et al., 2007; 明仁ほか, 2013; 鈴木・渋川, 2014a; Motomura and Harazaki, 2017; 木村ほか, 2017; Nakae et al., 2018; 萩原, 2019; 和田ほか, 2021), 本研究により新たに鹿児島県本土からも確認された。

同定 本研究において得られた標本は頭部, 体側部, および各鱗の地色がオリーブ色であること, 体側に赤色斑や赤色縦帯がみられないこと, 鰓孔上端に瞳孔大の明瞭な黒色斑をもつこと, 頭部上縁から眼を通り口角部に達する暗い灰みのオリーブ色帯をもつこと, 第1背鱗が円形であること, 背鱗基底に水色横線をもたないこと, 峡部から胸鱗基底下端前方にかけて溝が無く滑らかであることなどの特徴がAoyagi (1943), 明仁ほか (2013), および鈴木・渋川 (2014a) の示したアイコバンハゼによく一致したことから本種に同定された。

備考 Aoyagi (1943) は *Gobiodon micropus* Günther, 1861 を国内から初めて報告し, 新称としてアイコバンハゼを提唱した。しかし, 鈴木・渋川 (2014a) は *G. micropus* のホロタイプを調査し, 背鱗鱗条が VI-I, 13 (アイコバンハゼは VI-I, 10-11), 臀鱗鱗条が I, 11 (I, 9), 頭部腹面左右に溝がある(溝をもたない) こと, 両背鱗が発達した鱗膜でつながる(完全にはつながらない) こと, 体色が橙色を呈すること(オリーブ色)などの特徴がアイコバンハゼとは異なることから, 本種を未記載種とした。アイコバンハゼの記録は分布の項で述べたとおりであり, 薩摩半島産の標本は本種の九州沿岸における初記録となる。

謝 辞

本報告を取りまとめるにあたり, 鹿児島大学大学院農林水産学研究所の望月健太郎氏と是枝伶旺氏には原稿に対し適切な助言を頂いた。鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生とボランティアのみなさまには標

本の作製および登録作業においてご協力いただいた。同研究室のジョン ビョル氏, 望月健太郎氏, 鹿児島大学水産学部の松岡 翠氏および鹿児島大学ダイビングサークル「海洋生態研究会」の皆様には採集調査にご協力いただいた。Ichthy 編集委員の藤原恭司氏と匿名の査読者には本稿に対して適切な助言をいただいた。上記の方々に深く感謝申し上げる。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」, JSPS 科研費 (20H03311・21H03651), JSPS 研究拠点形成事業—B アジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009), 文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」, および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業(奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル)の援助を受けた。

引用文献

- 明仁・坂本勝一・池田裕二・藍澤正宏. 2013. ハゼ亜目, pp. 1347–1608, 2109–2211. 中坊徹次(編)日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- Aoyagi, H. 1943. Coral fishes. Part 1. Maruzen Co. Ltd., Tokyo. 12+224 pp, 37 pl.
- 萩原清司. 2019. ハゼ科, pp. 335–374. 本村浩之・萩原清司・瀬能宏・中江雅典(編)奄美群島の魚類図鑑. 南日本新聞開発センター, 鹿児島.
- 林 公義・藍澤正宏・伊藤 孝・新井良一. 1990. 奄美大島の海産ハゼ科魚類相. 国立科学博物館専報, 23: 123–150.
- Herre, A. W. 1927. Gobies of the Philippines and the China sea. Monographs of the Bureau of Science, 23: 1–352, pls. 1–30. [URL](#)
- 平田智法・山川 武・岩田明久・真鍋三郎・平松 亘・大西信弘. 1996. 高知県柏島の魚類相 行動と生態に関する記述を中心として. 高知大学海洋生物教育研究センター研究報告, 16: 1–177.
- 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯 健・小枝圭太(編). 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 200 pp. [URL](#)
- 益田 一・荒賀忠一・吉野哲夫. 1975. 魚類図鑑. 南日本の沿岸魚. 東海大学出版会, 東京. 379 pp.
- 望月健太郎・ジョン ビョル・本村浩之. 2021. 大隅諸島竹島から得られた初記録の魚類23種. Ichthy, Nature History of Fishes of Japan, 14: 48–53. [URL](#)
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)
- Motomura H. and S. Harazaki. 2017. Annotated checklist of mairne and freshwater fishes of Yaku-Shima island in the Osumi Island, Kagoshima, southern Japan, with 129 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 9: 1–183. [URL](#)
- Motomura, H. and K. Uehara. 2020. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Okinoerabu Island in the Amami Islands, Kagoshima, southern Japan, with 361 new records. Bulletin of the Kagoshima University Museum, 12: 1–125. [URL](#)
- Nakae, M., H. Motomura, K. Hagiwara, H. Senou, K. Koeda, T. Yoshida, S. Tashiro, B. Jeong, H. Hata, Y. Fukui, K. Fujiwara, T. Yamakawa, M. Aizawa, G. Shinohara and K. Matsuura. 2018. An annotated checklist of fishes of Amami-oshima Island, the Ryukyu Islands, Japan. Memoirs of the National Museum of Nature and Science, Tokyo, 52: 205–361. [URL](#)

- Senou, H., Y. Kobayashi and N. Kobayashi. 2007. Coastal fishes of the Miyako Group, the Ryukyu Islands, Japan. *Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science)*, 36: 47–74. [URL](#)
- Senou, H., Y. Kobayashi and N. N. Kobayashi. 2007. Coastal fishes of the Miyako Group, the Ryukyu Islands, Japan. *Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science)*, 36: 47–74. [URL](#)
- Senou, H., H. Kodato, T. Nomura and K. Yunokawa. 2006. Coastal fishes of Ie-jima island, the Ryukyu Islands, Okinawa, Japan. *Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum (Natural Science)*, 35: 67–92. [URL](#)
- 渋川浩一. 2004. コバンハゼ属, pp. 170. 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野惟幾 (編) 決定版 日本のハゼ. 平凡社, 東京.
- 渋川浩一. 2021. コバンハゼ属, pp. 181. 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野惟幾 (編) 新版 日本のハゼ. 新訂・増補版. 平凡社, 東京.
- 鈴木寿之. 2004. 各種(項目)の解説, pp. 22–512. 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野惟幾 (編) 決定版 日本のハゼ. 平凡社, 東京.
- 鈴木寿之. 2021. 各種(項目)の解説, pp. 28–551. 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野惟幾 (編) 新版 日本のハゼ. 新訂・増補版. 平凡社, 東京.
- 鈴木寿之・瀬能 宏. 1997. コバンハゼ, p. 615. 岡村 収・尼岡邦夫 (編) 山溪カラー名鑑 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
- 鈴木寿之・渋川浩一. 2014a. アイコバンハゼ, pp. 525–526. 本村浩之・松浦啓一 (編) 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば.
- 鈴木寿之・渋川浩一. 2014b. フタスジコバンハゼ, pp. 526–527. 本村浩之・松浦啓一 (編) 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば.
- 田中翔大・下光利明・瀬能 宏・宮崎佑介. 2020. 慶良間諸島渡嘉敷島渡嘉志久湾の魚類相: 144 種の追加記録. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 49: 107–118. [URL](#)
- 田代郷国・是枝伶旺・藤原恭司. 2022. ハゼ科, pp. 237–264. 岩坪洸樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之 (編) 薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 枕崎・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 和田英敏・古橋龍星・山田守彦・藤井琢磨・吉田朋弘・Kunto Wibowo・荒木萌里・伊藤大介・赤池貴大・中川龍一・渋谷駿太・是枝伶旺・出羽優風・餅田 樹・本村浩之. 2021. 徳之島初記録の魚類 122 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 7: 35–52. [URL](#)
- Winterbottom, R. and A. R. Emery. 1986. Review of the gobioid fishes of the Chagos Archipelago, central Indian Ocean. *Royal Ontario Museum Life Science Contribution*, 142: 1–82. [URL](#)
- Winterbottom, R. and A. S. Harold. 2005. *Gobiodon prolixus*, a new species of gobioid fish (Teleostei: Perciformes: Gobiidae) from the Indo-West Pacific. *Proceeding of the Biological Society of Washington*, 118: 582–589.
- 吉郷英範・中村慎吾. 2008. 庄原市立比和自然科学博物館魚類収蔵標本総合目録. 比和科学博物館標本資料報告, 8: 1–112, pl. 1.
- 吉野哲夫・山本隆司. 1984. フタスジコバンハゼ, p. 255, pl. 246-L. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編) 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 財団法人日本色彩研究所. 2001. 改訂版 色名小事典. 日本色研事業株式会社, 東京. 90 pp.